

俳諧茶話

863
148



国立国会図書館 タイトル『俳諧茶話』 請求記号 863-148

ガラス使用



今
二

刻此法茶法序



此法者小技也然了了不

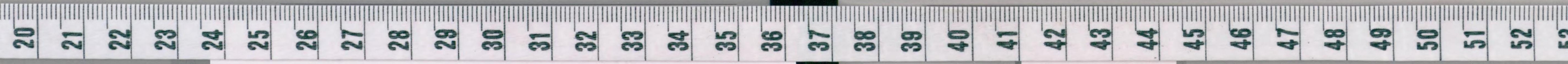
忘存身耐也形也連也

池也能各三葉中分而之致

則一也足取中者以玉貫

精妙之域此或為神

石
大
庫



物今物矣其他吾子所
謂句中一之魂史之徒然
耳一解之如風也月夜及人
物步款山海性亦守之而
不沈沈中一物也今人動
輒以沈沈為戲玩是也至

解直物是為保為于沈
之魔道也夫亦在杵
形之先生善刀十生之暇
法言說也南生能之值
若危則以貫其或通
月之法輝一或後亦之

巖書陸隱之書歌之露以
架成而新以夏生然心
此備友之公錄 正情然
必少失至多之選 韻也
以其是也 論其門人
簡得而筆之 稱 成一卷

名曰佛世茶話久又刻
之此書獲之者云
亥亥甲寅月佛誕日

一之應之高七枚得再出



雪北河の月乃又ある阿の鹿を
付今誰彼の書集あり茶話城
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち

雪北河の月乃又ある阿の鹿を
付今誰彼の書集あり茶話城
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち
いさく回しおのちのちのちのちのち

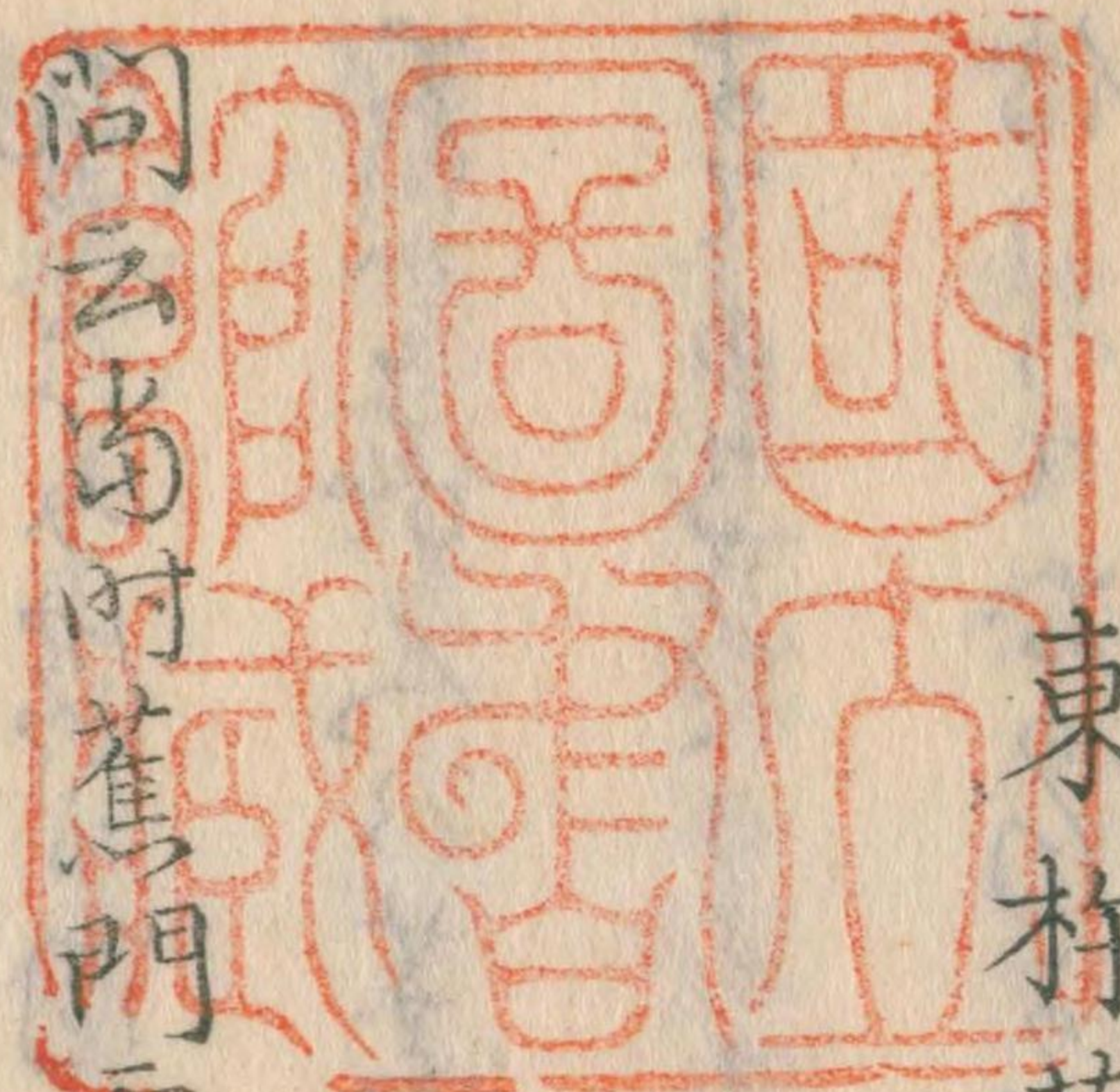
嘉永七年誕生 不物菴許一述

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

俳諧茶話

東村菴顧言先生口述

門人筆記



問云尚村菴門雪門其角坐其外は一派し有て各々自門他

門よりなりいなる類之也

一 答詩人唐に比し明を擬しつるは宋元を比する作者詩意の

劣之皆その繩墨成するよりあつては其の俳諧に至り又その

茶話



貞徳よりついでに必ず宗因を称し芭蕉にあはるる角と
と称し伊勢美濃二門杉家萬縁と一派しにさうきたる
他門はさうして芭蕉杉家美濃の風を学するものなきを伊
勢も美濃も同一流連のあとおふも門戸の別しになり
美濃はわんご蕉家の没後よおのどしく見識を立て教へ
まのりて別な教あるふらつてついでとて門人流
傳しておのりて一派しのやうに云なきもそは自然の勢ひ
さうしておのりて唯そをのりてついで人いよか
とておのりて自門他門と臂を張り別派也と心ほるは非なるなり

一 問云貞徳宗因はいふ

一 答貞徳宗因は蕉家の風はあはるるは芭蕉一派の所作なき
本教は俳諧歌何れも如くそは狂歌としてそは
して連歌の狂句を宗祇の門人宗鑑作り始めし次で伊勢
お守武もそは世に弘めりそは松永貞徳は一風を盛
に興して伊勢美濃といふものを著してそは式を連歌は習ひ
て連歌は二ツのものを俳諧は二ツとある處て用ひるは
もそはに準して差別を立てるはそは式始て
定まらざるは歌の俳諧体より連歌の俳諧体興るなり

夫ハ宗鑑ヲ老テ思ハ付タル存スヘー一同時ニ武仕年ニ
テハ又長一今モ武平句といふ書刊行セー其の終り
生偽ハ甚ク多ク以テ宗鑑ハ師の連歌に及ぶるありといふを
看破して別に洒落又作り出ーたる心さうによつて筑波集并
師の新筑波又習ひて犬筑波といふ集を作りたる則ち此
名ヲや俳諧茶話の名ニ放たり爰ル古人の風流と深きところ
有りて其味ハあり

一 同云許六ハ滑稽僧ニテ武宗鑑と次勇一といふ

一 答いりもさういふべきに宗鑑ハ其に俳諧の権輿ニテ武ハ

是ニ次テ行ハシ一其の宗鑑ハ隱者也守武ハ伊勢ハ
神職ニ世ニ立交ると世をいふこととの差別有りて宗鑑ハ
や武の法ニ付たるやうに世の人一思ふ

一 同云晋子の句ハ解一釋するにや多し幸に空然翁の

五元集小觴有りてあるや一ハ分りたきといふんやうと今

はせしむる句ナキハ有らば

日本の風呂吹といへ比叡山

け句小觴の註ニ日本天台根本三千坊比叡山といふ

一とを斯典一といふあり

一 若小鶺鴒の解ハ、
此注解のやうに委々々々、
馬寮たげよ 説キヤ 雁一 け句ハ 晋子ウ 句の中マテも 殊ニ
解一 疑々 句ハ 空然 始ケ け註を 下セリ 扱比 敷山ハ 傳
教 大師 唐土の 天台山ハ 受法一 して 飯朝の 後 延曆 中に 日
本一 始テ 天台宗を 弘メ 根本 最初の 山之 坊 数 三千 坊 行リ
是より 所作 言マシテ 晋子ウ 身子 淡々 ナリ 好ム 句
風ニ 世に 謎 句といふ ことと 晋子ウ 滑稽 稽 洒落 出テ 一 興
の 句作と 知ルヘ 坊の 字 本んと 讀の 例ニ 是ニ 是ニ 風呂 吹の

句ハ 比 敷山の 句ニ 是ニ 是ニ 風呂 吹 大根の 洒落 是ニ 是ニ
こと 又ニ 一 三千 本の 風呂 吹 心 裏言 外ニ 是ニ 是ニ 日 本
の 二字 動ル 是ニ 是ニ

一 問云

いさよひや 就 眼肉の 衣

け 句小 鶺鴒の 解ハ 十 五 在 時ニ 是ニ 是ニ 賞 玩一 して 十六 日の 夜ハ
も 是ニ 是ニ 一 して 是ニ 是ニ 一 して 是ニ 是ニ 一 して 是ニ 是ニ
例の 洒落ハ 就 眼肉の 衣ニ 作リ たる 是ニ 就 眼肉と 是ニ 是ニ
思ハ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ 是ニ

路いり

一 茶汁を肉こそ茶よしなを売らふ用のものなをて我り眼
 もさのふい月の肉をよしし詠めり今ハ眼も心も言外を
 て我眼肉の売も一枚にて十六枚の月ハさのめを賞よ及て
 比と心仍て我眼肉の又字に力ありと云進も

一 同云

芭蕉翁の沙弥くげの

わーとまて繪讀をきけよ

やめてよめめ之柿よんめの志

け句いりて言はすはくはく

一 答小鶴よいりて茶翁の沙弥をくげに并しきんおう

いりて歌人の家のいりてあらと心きんさは柿ひら

画かきり人丸の垣ほむ柿むの梅と讀んたる

今更之柿といあやしき垣と云んとなり有梅山家得春乃

さし通小町の謡曲よ歌人の家おこのよん丸の垣ほむ柿山

の茶のいり栗あむ梅園の梅といふをなて一作もいり今

茶をいり柿垣書三字のいりてかんの訓ありて皆をいり

を念めり解會吟味も一室よ作中の作人と称せり



一 同云

氷肌玉骨と云ふ

昔又云一をある香も梅の皮

付句いふ

一 蒼氷肌玉骨ハ李益リイシ青梅アヲメの詩シハ青梅アヲメ如ニ豆マメ試シ嘗シ新ニ脆ク積ル

虚中キョチュウ未有ムク仁ニ勳クン破ハ収ウ香カウ蔵ザウ白ハク處ト氷ヒョウ肌ミ玉ギョク骨ボネ是シ前ゼン身シンと云ク付ケ句コト

之レと題ト書シと云ク味ミハ香カウ一ニ昔シハ氷ヒョウ肌ミ玉ギョク骨ボネなりシと云クハ枯コ

瘁ソウの老ラウ木ボクなりシといフは之レ梅ウメの皮カとハ力チカラ有りテ尤モトモト絶ツク妙ミョウといフハ

猶ナホ小コ觚コの注チュウよて又マタ一ニ

一 同云

芭ハ蕉コウの腐クと云ク

芭ハ蕉コウや十日ジュウニチ色シロも同トウ一ニ梅ウメ

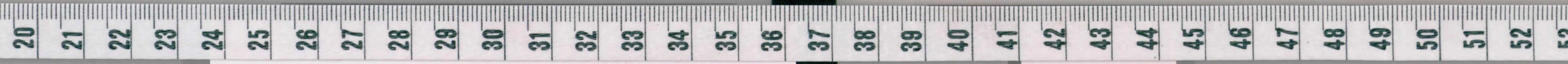
付句いふ

一 芭蕉ハコウ書カキみて田タ公キミめノいふをコト梅ウメ一ニ昔シハハハヤハヤハヤハをコト梅ウメは

只タハ梅ウメハヤハヤハヤハに十日ジュウニチ色シロも同トウ一ニ姿シタテよていふハは

同トウ云クもハありシと云クハ老ラウ木ボクとハ竹タケ由ユ細ホソ觚コハ云クハ角カクハの乳ニ

をコト梅ウメにシ腐クハハをコト梅ウメハヤハヤハヤハと云クハ解トクよてハハハ角カクハ自ミ負ツ



のやうふも茶のしくや思ふよてハ只いぬをさして作さる。句なる。
角一志うははる平常跌坐静心自若の有さるやまを自得
三百六旬於一日の如一言外に涼くあふ

一 同云

いひあふ茶教ん色のあや

け句い

一 答言ハ茶をとりて人の賞せしむる人間は善茶をよくする
茶あまきと茶に善茶の茶をいひて茶よふ茶を茶教
たふよハけりいなる。妙声ハ張せしを茶をいひの或人と起

る。と生を隔つては只け茶をさくまに歎息と酒をせ
一 句言なる。一 一あやハ文よて雅艶といふ如

一 同云

腕押のりさるなくふ梅の花

け句い

一 答人の欲ある。ゆに争て衆人に冠たんと欲するは
梅ハ心ふしておのりさる百花の魁といふをさる也と親
想のさよ一腕押ハ俗ハ腕だてといふ如一 雅小筋の解
よて味ふる

一 同云

雪のやぶを逆子ばつらな

付句いふ

一 答うていふお立春にまうて樹上ふり轉々反側しては
 ば音を羨まらむに人のやあふを欲するよ似たり声
 既よ羨まむを人皆こときを賞す元物をり歎賞をほよハ
 劬勞して始てこときをほよの角う句を作も亦然り方を逆
 子といふをまうた力を務むるおまの句の頭書よ止立隅と
 あふのやぶを逆子をばつらなをきりてかきりて人よもやあふ

一 女あふのやぶを表せり鴉小鶯の解るる

一 同云

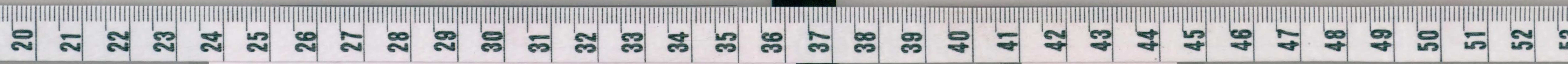
茶抄にまうて繪よ

うのやぶの曲々枝を削りん

付句いふ

一 答うての曲々枝の木あふなく井をりていふ
 曲々井を以て茶抄を作りてやんをまうて今又まうて
 茶抄よまうていふと茶抄よまうていふ

一 同云



待乳山
一 待乳山の満る棹のふとよの鳥

此句待乳山よりの眺を眼帯と小鶴は注けりの猪牙舟の小蒲室
のふと

一 答によひ満るといひて十五夜を合めり月光をいちりて
白登の如きは鳥といふは森はゆりて猪牙舟の小蒲室
よんなをさういちりては森を句作をて棹のふとよ
いふは母を合たり晋より自作如けはよいちりては境

一 同云

志うすも茶師の旅毎の十五夜

け句小鶴は是ハ宇治の茶師といふを蒸らすもと句作は
ふといちりてはかに何をさ味何るふとよや

一 答別より細い何る魚よりは晋子の滑稽大概期の如く上林
某なとは旅探の次を思ひ出せ句は

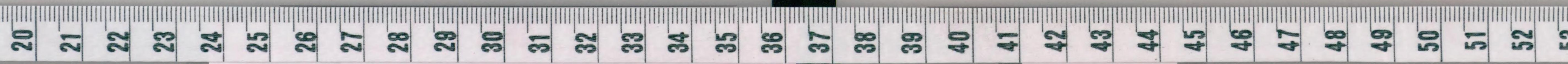
一 同云

茶もいちりては夜は鏡を山に

け句いり

一 答小鶴は茶もいちりては腰をかけては休み山

一 同云



様の入相が落椿の風情を又んり為こといふ句なり入相の落を
 やまといふ言ふふかたのふふ茶心といふ句なり——計りに
 つかぬ心の夢はかたのふふ茶心といふ句なり——理座より
 出てその理座道徳をのうとして一句の姿をなすハ晋より句作
 の強さを覚えて自由自在のふふ茶をあやつ——句の姿
 悪い時はなして出ずふ出ず何をなすこなり——の自在なるふふ茶
 は悪い時のふふ茶なる句——掛けぬお心の句に

鎌倉よ杖の集る十夜うな

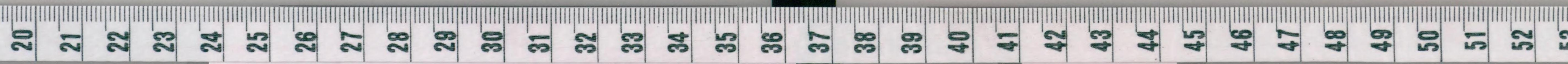
といふ句を作りたるは是よりハ晋の多く集るよりを理座

よ云立りりささきは句といふか——杖千本の十夜ぶといは
 てこそ理座を離れて落椿の姿ハ出ずたりささハお心よハおは
 るよりかたのなるをなすは古人のふふ茶の夢はさるハ元よ
 そこの夢と心はさるハお心をさるハやうに執りさるハお心
 肝要なる事に接し歌を引さるハお心を引きたる句ハその
 るにたつさるハお心をさるハお心もこころとてさるハお心
 なす句の夢はさるハお心を執り落椿の元を落すやうと
 覚える句——

一 問云晋より書き終焉の記を世の中に枯尾の序といふ

俳諧

十



一 八語りよて文飾も序の格も何れもなきは宗祇は時の終焉也
記よるるて書しるものふや

一 答さる有へ元禄七年十月十八日廿日翁の初七日よて百
額無り有り右の系を枯尾をと標致をよる系の始よこれ
終焉の記を生り依て世は枯尾の序と心ほるるへふに誤る
終文中は魚うは終焉の記を終へしとあるふて明る
一 同云終焉の記よ三更月下入我といふを宜夢の註よ入我
入我我入對しる所の一体也といひり

一 答豆妻此註當りて江湖風月集卷一 三山偃溪聞和尚

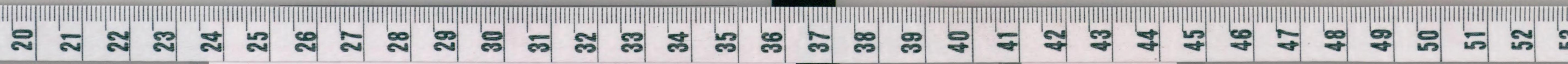
の偈は路不資^テ 狼笑復歌^テ 三更月下入^ル 無何大平誰^カ 整閑戈甲
王庫初無^ク 如是刀と是の角暗記の一失よて何を我よ書誤
アハハハ

一 同云曠野集よ

蓮の宮ぬけは たる蓮の宮り 越人

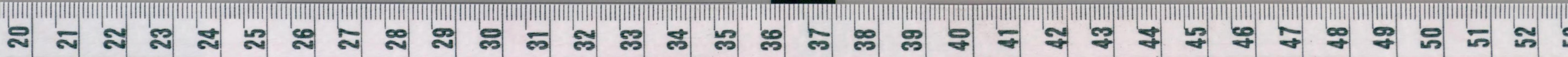
け向たる人の説よ越人素堂を一行は例の蓮池より蓮の宮
を居りてよてなすに皆くひらてぬけは たる蓮の宮り
ゆるなひらと池をよるの挨拶をよるは不敬よ
あるよるかち毎つら 句作といひり

茶話



一 答さふらつらつとていふもあつて越人素堂のふりて蓮の美の池
 走らひひらひらよせよ皆喰ひてぬけきとて蓮の美の
 りうなひらと馳走をさくすくせぬ投とらおらうかひん思
 按よつら蓮の花の清香なるものも云て佛家さひ清香
 を愛しつゝ蓮をを玩ひて佛坐も成し又浄土の池中
 蓮花の大車輪の如くも説り唐土よ美人の顔カガミもたよく
 もつ芙蓉不及美人粧といふも蓮をのほ香のかさよ
 つるまはゆさつて美人なりといふも芙蓉といふは即ち蓮
 をのほ今つふ芙蓉ハ木芙蓉といふもの素堂ハ山口氏某

の隱遁一たるか謝靈運の癖を傳つて蓮を愛せり蓮菴
 と云素堂といふ尤白蓮を愛せりと見えりそ氣性清潔
 たる様にて見えりそ素堂に對して越人亦そ向上の趣
 きを向作するもやいけ清香淨潔の蓮に愛せりといふ
 りもこそおななりとて蓮の美らけきとて流る
 もなく売をるるに成たる蓮の美らけきとて流る
 作よつて尤蓮の美情を尋出し見附出たる向上の趣向を
 尋ひて通つて投酒落の句あつたつて
 新茶や叶をにそく実のよみ



いふ句をとりて解きし一付句作者忘るしおのひのひの句
言ひし

一 同云祖翁の傳合は偽作なりと云まらやんをたのむし
うらまはし

一 答をよむの画歌仙といふ書の序は芭蕉の俳諧三百五十巻の
中百五十巻の偽作也と云まら自筆よて書きたり猶又別
よる偽作の巻一句毎に元俗の精神なりと評して何
れ是れ自筆よて書きたりといふ書もいひしやんする一
よる豊の卓見にして元眼の及ぶまらあはる

一 同云古本傳書は百韻四花八月のうち定生を立てし
になするを禁はしむるは月世の系物連俳の眼目なまは
短句よる也といふ右の如く心はるし
一 答をよむの宗祇法師なまは是等のいふ云をたれを
よるる一はしむるも芭蕉の俳諧の宗祇の連歌を
よるる俳言を用ひ連歌の式を取て連歌の式を用ひ
規外の有規規中の無規と云ふより出るる規をよる
時に連歌一語の俳言なく規をよるる。時に俳諧の連歌
といふ言はしむるは四巻八月の百韻の式なまは缺く

るあつははされと長短句の差別なく時区より差合
去姫の場をよく見定めて居ゆ。之依て薫門は月花定
望といふもな一時表は八月なつてかなはは裏は月を
なくてかなははと知も命一されと今時の老俳片服は
さつとさつとさつとて往傳の時傳やと口走るやうな多けさ
秋さつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと

○も橋表四句目二月

川子の獨よわくを引きて 曾良
形や花あつた見も三日月 釣重

○伊達衣名表十句目二月

伽よなる高鴨乃 餅をさつと 等窮

四あひ月をさつと 蛭の屋 栗高

○いさこ表六句目二月

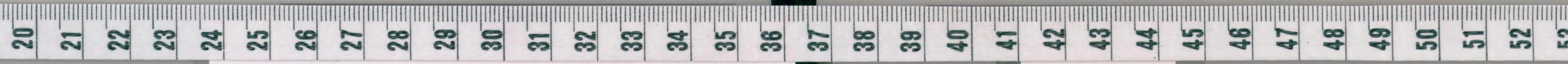
紫茶條のふきをかきすた入る夕日 珍碩

親子並ひて 月ふもくふ 全

○同集裏十句目二月を結ぶ

旅姿稚き人乃 姫つきて 路通

ふらありいよ月ハ 膝夜 全



是にかゝる御茶の味はあまの味なり

其の味はあまの味なり

相紅

柳の葉はあまの味なり

重五

はなはなとあまの味なり

17

山にあらざるは減らる岩の角

湍水

あまの味なり

あまの味なり

あまの味なり

なまの人の小袖も今やお用子

芭蕉

らんらんなど三葉のあまの味なり

中のかといふ

但一畧するゝ畧
さぬと二例あり

其の味はたれう初敷の堂

多良

いく人々のあまの味なり

お茶

たき入りのあまの味なり

お茶

天井のあまの味なり

去来

夕立にびの大若う

傘下

是ホよて

乙州 乙州 乙州

名月や富士の思ふ所 駿河町

益の目録の思ふ所 那坡

カト見テ カトキテ カトシテ
カト思フテ カトイフテ

一 尚云申のやとふりい

一 答中のやと二例あり下のうち合せを畧すと畧すめと

申のかよ同

永のやとふりい

子やとふりい

乙州

素齋

那坡

なと心

七

七

七

荷号

杉風

越人

是ホ皆申のやとふりい例之又畧せる例なりと

たのねのやとふりい 勢田の橋

たのねのやとふりい 浮世の謀拂

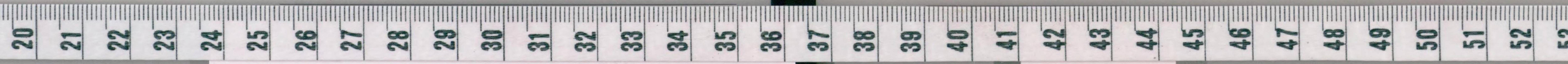
たのねのやとふりい 田代の

梅のやとふりい 次直の

象のやとふりい 西施の

夕立の傘のやとふりい 一町

なと心木の根のやとふりい



風流のたしめたる田植唄ナラシ 芭蕉

すしれまの鍋あはれ一語ナラシ 曲翠

厚ゆかたナラシ 芭蕉

山ナラシ 亀洞

妻はら田植ナラシ 許六

又たおもんナラシ 長虹

笠置ナラシ 芭蕉

お習ナラシ 全

是木の類と

一向云よのまひナラシ

一答よの心ナラシの上の縁のやめナラシ反ナラシ五十音ヤとヨと真反ナラシ

一やハナラシまナラシふナラシくナラシまナラシぬナラシ心ナラシよナラシハナラシこナラシのナラシ方ナラシとナラシかナラシぬナラシ心ナラシとナラシ

一いナラシたナラシまナラシのナラシ了ナラシよナラシとナラシふナラシ人ナラシのナラシなナラシまナラシなナラシどナラシよナラシめナラシるナラシとナラシよナラシハナラシ俗ナラシ語ナラシよナラシッナラシ

一レナラシヨナラシくナラシとナラシふナラシ心ナラシとナラシけナラシおナラシにナラシいナラシよナラシハナラシあナラシりナラシあナラシらナラシむナラシをナラシ四ナラシひナラシかナラシ

一ハナラシずナラシおナラシのナラシ心ナラシとナラシいナラシのナラシ今ナラシのナラシ場ナラシよナラシうナラシハナラシうナラシハナラシるナラシおナラシ方ナラシ又ナラシてナラシ循ナラシ

一セナラシしナラシとナラシぬナラシ場ナラシとナラシなナラシりナラシアナラシあナラシらナラシとナラシこナラシのナラシ差ナラシ別ナラシよナラシくナラシ并ナラシふナラシハナラシこナラシれナラシとナラシ

一知ナラシぬナラシおナラシかナラシしナラシとナラシ四ナラシひナラシずナラシおナラシのナラシ心ナラシとナラシいナラシのナラシ今ナラシのナラシ場ナラシよナラシうナラシハナラシうナラシハナラシるナラシおナラシ方ナラシ又ナラシてナラシ循ナラシ

一よナラシよナラシまナラシとナラシしナラシハナラシこナラシれナラシとナラシいナラシのナラシ今ナラシのナラシ場ナラシよナラシうナラシハナラシうナラシハナラシるナラシおナラシ方ナラシ又ナラシてナラシ循ナラシ

の方よりみりて魚はいとぬやうになきり

今サイとよハカ
つめいしーに

よくあ さきはなといつて那菜のふとの世は心ほくささ
たきり

よけいすてなとい魚肉那菜ともに飯にまてくふ物の

名ことさうけなとい名の義も飯とよく持合て他乃

菓子なといおよばさうゆの名ことさひとつをりもなと

い詠嘆の心さうけい

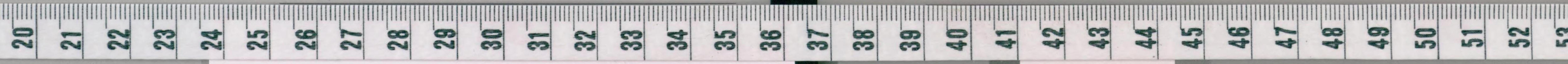
むさんやなぬさ下のさうけい
とと城

二日よぬういせいなむり
全

いささかやういささか
越人

是ホの句よいささか

俳諧茶話 終



人への書め

内より 四時の

標

蓬草や思勝 子もなき思つゝ
 端かきとをなくしてまゝくさる風
 形えたる尾をかねん 鐘二重
 明月やみ見とめをえとみ共
 を探る心もつゝ持たさ 桜
 花つゝ日如きやうと濱の秋
 空 宜

柯自

整態

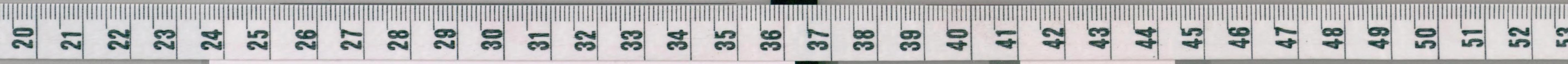
柯調

吟蛙

顧夕

詩一

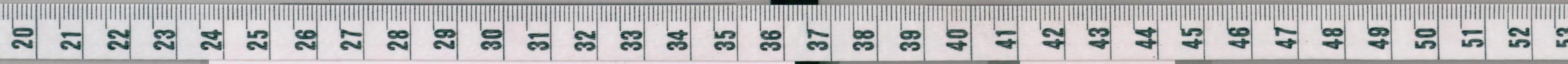
空 宜



試ふふもるふも新茶分
あつかり土に結る方を厚食
ちる様既に弥生も以海す
市のを積りて言ふり
うらむやうりて其の志
心あらねむせん不さる
お花種おつけるを記月
瓜むけをばや松風のそよぶ
か下りて涼拾ふ魏子うれ
言蘭
擇柯
柯文
東和
蘆舟
月学
記月
杉宇
柯明

産毛刺るもえく茶や冬の妮
橋越せもやわびうよ空を仏
目下は柳へ成る ねむち茶
菖の系眼ししと境う
あつかり土に結る方を厚食
ちる様既に弥生も以海す
市のを積りて言ふり
うらむやうりて其の志
心あらねむせん不さる
お花種おつけるを記月
瓜むけをばや松風のそよぶ
か下りて涼拾ふ魏子うれ
言蘭
擇柯
柯文
東和
蘆舟
月学
記月
杉宇
柯明

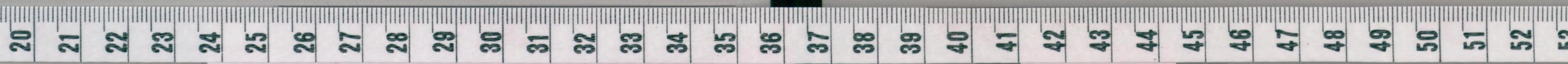
コニ

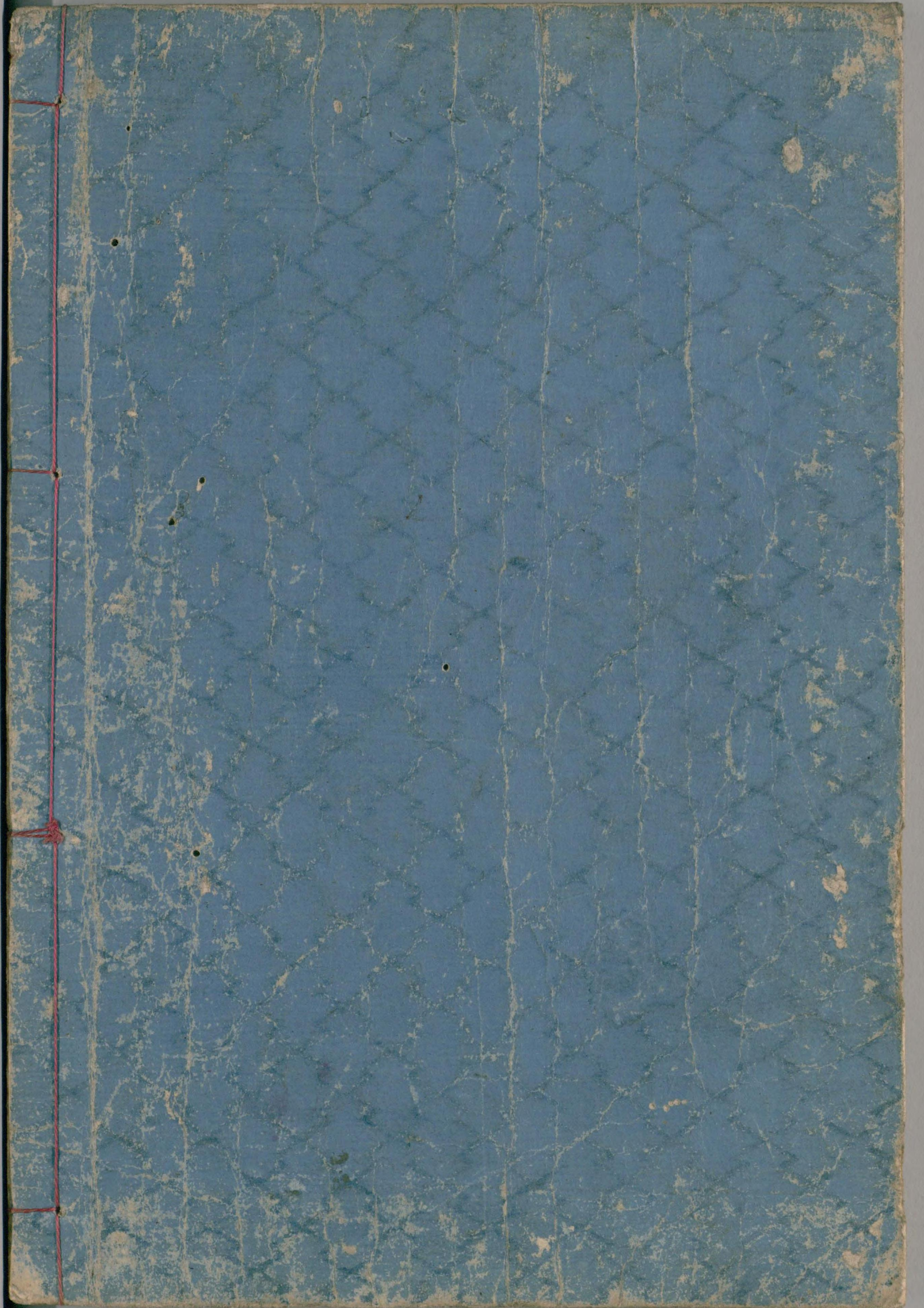


863
148

14183

いさよふふとてなほなほ風をあらう
けちかふいづ海とさうらに月悟
都を山吹の風をうらみさうら
まの招はまけりしを思ひ粟の
氏より茶育つまふさうら茶本
是末一書きけ侍りぬ





国立国会図書館 タイトル『俳諧茶話』 請求記号 863-148

ガラス使用